

日本英語教育史学会 会報

309

2022 年 6 月 12 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

 学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第38回全国大会報告

2022 (令和 3) 年 5 月 14 日 (土)・15 日 (日), 第 38 回全国大会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。初日は田崎清忠氏 (横浜国立大学名誉教授) による「テレビ英語会話放送の歴史的経緯: 内容・提示技法の開拓」と題する講演, 及び 2 本の研究発表が行われました。第二日は 6 本の研究発表及び「今, あらためて問う, 英語教育の意義」と題する参加型シンポジウムが行われ, 2 日間で 126 名の参加がありました。ご参加いただいた皆様, 関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。

研究発表タイトル・発表者一覧

- 発表 1: 『官許 英和通語』の系譜: 明治中期以降における英学書への影響
熊谷 允岐 (茨城大学)
- 発表 2: 英語カードの研究: 教材教具史の一つとして
馬本 勉 (県立広島大学)
- 発表 3: 他教科内容を生かす戦前と現代の小学校英語の比較考察
二五 義博 (山口学芸大学)
- 発表 4: 中学校に戻ってきた文法事項:
半世紀前の教科書・移行措置教材・現行教科書の扱いを比較する
久保野 雅史 (神奈川大学)
- 発表 5: 「文検英語科」の研究: 検定委員・神田乃武をめぐる一考察
惟任 泰裕 (中九州短期大学)
- 発表 6: 雑誌『英語教育』における大学入試への民間試験導入に関する言及の類型化:
2000 年 4 月号から 2021 年 3 月号に限定して
孫工 季也 (京都大学大学院)
- 発表 7: 平川唯一「英語会話」テキストの研究:
先行する「英語会話講座」「実用英語会話」テキストと比較して
柗木 貴之 (北海学園大学)
- 発表 8: 軽井沢夏期大学における英語講習会
江利川 春雄 (和歌山大学名誉教授)

＜講演の感想＞

◆内容豊かで、学ぶところがたくさんありました。また、先生の時間のコントロールぶりには驚嘆するしかありません。ハンドアウトから推測いたしますに、お話になる予定になっていたことがまだたくさんおありのようです。ぜひ続編をご企画ください。田崎清忠先生、ありがとうございました。(大津由紀雄)

◆テレビ放送が開始された当初、アメリカから輸入されたフィルムを使っていたということ、それが貴重であったため、再利用したことで過去の映像があまり残っていないということ、そのほか歴史的事実をリアルに感じることができるお話を拝聴できてよかったです。(松田正貴)

◆私は今、70歳で若い頃NHKのテレビで田崎清忠先生の放送を聞いていました。感動しました。感謝です。(西義一)

◆都合で途中までだけでしたが、大変興味深く思いました。1週間ぐらい視聴させていただける機会があるといいなと思います。(Okamoto Noriko)

◆田崎清忠先生のご功績は英語教育史において燦然と輝くことは間違いのないと思います。こうした時期に先生ご本人の歴史的なご講演を視聴させていただけたことは本当に幸せでした。(平松進)

◆改めて先駆者である田崎清忠先生の大きさを実感しました。昔々、私に言語学、英語教育の入口を示していただいたのはアメリカ構造主義・ブルームフィールドと田崎清忠先生の英語教育技術でした。先生の益々のご健勝、ご指導を祈念いたします。(キョ友会メンバー) (杉本定)

◆田崎先生がTVを介した英語教育分野のパイオニアとして、米国で学ばれた各種メソッドをベースに、NHKのディレクターなどと緊密な連携を保ちつつ、観て楽しくてためになる番組作りに注力された背景がよく理解できて大変有益でした。特に、タクシー運転手を演じるための事前のご苦労とか、スタジオ内で瞬時に板前さん等の姿にコスプレ七変化をして隣のセットへ移動した等のお話は、臨場感に溢れて大変興味深かったです。現在のTV英会話番組のありかたへの苦言も、自分自身が常々同感であったので、納得できました。レジェンド田崎先生の番組で英語やアメリカ文化に開眼した者のひとりとして、当時を思い出して感謝感激でした。(棚橋征一)

◆テレビ英語会話放送の初期の様子について、失礼ながらお年を感じさせない歯切れのよい語り口で、整然とまとまった内容のお話しをください、感服いたしました。時にユーモアも交えられて、また、なるほどと思わせる教授理論をも織り交ぜられてのご講演を拝聴して、ぜひ紀要の方に活字化して残していただければと願っております。(Dragon)

◆近年、オンライン授業が増えている中で、田崎先生のおっしゃった“hello everybody”のくだりに大変感銘を受けました。「皆ではなく、あなた個人にかたりかけているんだ」というその心遣いは、オンライン授業においても、とても重要になってくると感じたからです。何よりも、田崎先生の流暢でパワフルなご講演には本当に驚くと共に、終始引き込まれてしまいました。このような貴重な場に参加させていただけたことを、心より感謝申し上げます。(ポレポレ)

◆田崎先生は中学時代、3年間担任の先生でした。自分が中学のクラス会の幹事で、今回の講演を先生に紹介していただきました。先生のお話は分かりやすく楽しかったです。ありがとうございます。広辞苑で「喋る」を引いたら、口数多くぺらぺらと話す、と出ていました。英語では「話す、speak」との違いを意識すると chat とか chatter になるように思います。どちらも動詞、名詞ありです。(寒川光)

◆ご説明はわかりやすくユーモアもあり、見せていただいた動画も興味深く、素晴らしい内容のご講演で、拝聴させていただけたことに感謝いたします。同じスペースにおられた、実行委員の方々の雰囲気も画面から伝わり、先生おひとりでの講演よりもよりよいものになりました。ありがとうございます。(CY)

◆会員でなくても視聴可能とのことで参加させていただき、ありがとうございました。田崎先生のようなフロンティアが日本を先導してくださり、改めて感謝いたします。新たに学ぶことが多くありました。特に向かい合った人から見た手の動きなどは、今後、心掛けようと思いました。このような学会があることを知ることができたのも知識が深まりました。(一柳優子)

◆まるで1つのテレビ番組を見ているかのようなエンターテインメント性と内容を両立したご講演に聞き入ってしまいました。ご講演後の余韻に浸りつつ、同時に次回作を見たいという衝動に駆られています。有意義な体験を提供していただきありがとうございました。

(Koyamamoto)

◆田崎先生のご講演ということで、参加申し込みさせていただきましたが、急用でリアルタイムで出席できませんでした。申し訳ありません。どこかで動画等があればそちらを拝見させて頂いてから感想を述べたいと思います。お世話になり、ありがとうございました。(松本実)

<発表1の感想>

◆「官許」とわざわざ銘打つということは、海賊版的な単語集のようなものがすでに出回っていたということなのかなと色々と想像してしまいました。また「元素分野別単語集」というカテゴリーは大変興味深いです。エリートエンジニアの育成向けの単語帳だったのでしょうか。

(松田正貴)

◆歴史的な分析の重要性がわかりました。(Okamoto Noriko)

◆大変興味深い内容でした。(CY)

◆熊谷先生がご研究の中でされている独自の分類方法が私個人としては非常にわかりやすく、膨大な資料を頭の中で整理する上でいつも有難く思っています。機会があればネーミングに至るまでの過程を伺ってみたいです。(Koyamamoto)

<発表2の感想>

◆単語カードは、学習者もそうですが、教員が所有していて、たとえば英作文などのアクティビティに使った可能性もあるのではないかと思います。当時は、高価なものだったと思いますので。いずれにしても、とても勉強になりました。(松田正貴)

◆カードという大変外国語教育において重要なリソースを歴史的に分析するという視点の斬新さに興味をもち学びました。(Okamoto Noriko)

◆明治以降に登場したカード型の英語語彙学習教材の一考察として、大変興味深く拝聴しました。欠損部分を他の教材との比較を通しておおよそ推定するという手法も大変面白く、今後機会がありましたらより詳しく教えていただきたく考えております。(ポレポレ)

◆とてもわかりやすいご発表で、大変勉強になりました。(CY)

◆附属中学の英語研究会が戦前に作成したカードに近年注目を集めている「個別最適な学び」に通じる「学習の最適化」の要素が含まれていることが大変興味深かったです。(Koyamamoto)

<発表 3 の感想>

◆明治期に「英語と他教科」との融合が見られたというお話だったかと思いますが、昭和初期の「国語と他教科」との融合を思い浮かべてしまいました。サクラ読本以降の教科書編成に応用されたのかなと勝手に想像してしまいました。(松田正貴)

◆昨今脚光を浴びている CLIL が戦前の我が国の英語教育に見られたことに驚かされました。(平松進)

◆ご発表を聞く限り、日本の英語教科書は随分と昔から、しっかりと作り込まれていたという印象を受け、当時の編纂者の熱量が伺えました。明治期に編纂されたいわゆる市販教材においては、編纂者の語学力や知識の深浅によって教材の質にバラつきが生じていると思うのですが、当時の教科書はどのようなものであったのかに興味を沸きました。(ポレポレ)

<発表 4 の感想>

◆私の息子(現在高校一年生)にも Bridge について尋ねてみました。教材は確かに配布されておりまして、p.5 のみ少し学習の痕跡が見られますが、あとは手付かずになっております。これは私の息子が不真面目なだけなのかもしれませんが。(松田正貴)

◆細かな精査で、文法事項の変遷が分かりました。些細なことですが、help O (to) do において to のあるなしの違いも認識できました。(平松進)

◆歴史の中に埋もれ風化することを防ぐという意識の中で、貴重なご研究を拝聴出来たと思っております。久保野先生もおっしゃっていた通り、日本の教科書は、海外の参考書とは文法項目の提示方法や順番が異なりますが、日本の教科書間においても、若干の違いがあるように思ひ、とても興味深かったです。(ポレポレ)

◆学校現場で英語を教えている者として、現代的視座に富んだご発表内容に日々の実践でのヒントを得ることができました。歴史は顧みるものであると同時に進行形で紡いでいくものであることに気が付くことができました。(Koyamamoto)

<発表 5 の感想>

◆「文検英語科」の研究から神田乃武の英語教育観をあぶり出していくというプロセスがスリリングでした。とても勉強になりました。「ナチュラル・メソッドをも含むけれども、ナチュラル・メソッドだけで神田を語ってはいけない」というメッセージが記憶に残りました。

(松田正貴)

◆神田乃武という凄い先達の功績をよく知ることができました。(平松進)

◆惟任先生のご指摘通り、市販教材などの多くは神田の名だけを借りるものも多かったようですが、文検に関しては神田の影響力が鍵となっていることを聞き、とても興味深く思いました。文検に焦点を当てた研究が蓄積されれば、神田自身の英語観や言語観を含め、様々なことがより明確になってくるような気が致しました。(ポレポレ)

<発表 6 の感想>

◆ぜひとも今後「闘いの歴史」を明らかにしていただきたいです。いずれにしても、データの蓄積が必要だと思います。「闘い」は、今回の民間試験導入のことだけでなく、かなり長い歴史的広がりがあるとは思いますが。(松田正貴)

◆今日的な課題としても、更なる議論を深める意味のある課題だと改めて思いました。

(Okamoto Noriko)

◆民間試験導入に対する「声」の内容分析を、雑誌を用いて行う点にとっても興味を惹かれました。拾いきれない、あるいは表出化してない声があることはもちろんでしょうが、異なる教育雑誌における「声」を比較してみても、また新たな発見があるような気がします。各出版社によって、思想や志向が異なることから、同じトピックであっても違った観点からの声を読み取れるのではないかと思います。(ポレポレ)

◆雑誌『英語教育』が読者に与える影響として約 20 年間での販売部数などの変遷が気になりました。私の主観ですが、学校現場では雑誌『英語教育』の読者は減少傾向にあるような気がします。(Koyamamoto)

<発表 7 の感想>

◆朝ドラの「カムカムエヴリバディ」は毎日(録画したのですが)、食い入るように観ておりました。藤本有紀さんの脚本はストーリー展開が巧妙ですから、見入ってしまいます。ただ、占領軍の描き方がまったく不十分だったという印象は否めません。平川「英語会話」のテキスト研究はとても勉強になりました。(松田正貴)

◆大会発表賞受賞、誠にありがとうございます。資料の収集や分析を本当に労を惜しまず行われていたとも伺い、発表の質の高さに納得がきました。平川が述べるところの「生きた言葉」、すなわち「いのちの流れる言葉」を考えたときに、今回のシンポジウムで取り上げられていた、「英語教育の意義」と、なんとなく繋がるような感覚を覚えました。英語はわれわれにとってはコミュニケーションの「道具」という側面があるかもしれませんが、英語を母語とする人にとって、英語とは「言葉」であり、そこにはまさに「いのちが流れている」。拡大解釈かもしれませんが、柁木先生のご発表を思い返したとき、そのようなことを思い浮かべた次第です。(ポレポレ)

◆綿密な調査に基づいた発表内容の充実度に感銘を受けるとともに、研究にかける想いと努力が十二分に伺え、歴史研究のあるべき姿を提示していただいた思いです。(Koyamamoto)

<発表 8 の感想>

◆民間主体による教員の自主研修と言いますと、つい自由民権運動期における農民運動的な学びと重ねあわせてしまいます。まったく異質なものだのだろうとは思いますが、英文学をとおして「民主主義」を学ぶといったようなイデオロギー的側面はなかったのかなと思いました。ご紹介いただいた文献を私も読んでみようと思います。(松田正貴)

◆実践をもとにされている分析で、本学でも英語講習会を開催していたことから重なる課題があると興味深く思いました。(Okamoto Noriko)

◆江利川先生のご発表は豊富な一次資料とそれに基づく説得力のあるご説明ばかりで、常々勉強させていただいています。「超一流の講師陣」が名を連ねていたというお話はまさにその通りだと思いました。講習会に関する内容の書き起こしや、受講者の感想などが存在するならば、是非とも拝見したいと思うほどで、私も一度受講してみたいと思いました。(ポレポレ)

◆私が「夏期大学」というものを知らなかったこともあり、綿密な調査に基づいたご研究もさることながら、わかりやすいご説明と発表構成のためにまるで大学の講義を受けているかのような学びの多い時間でした。また、避暑地で錚々たる顔ぶれの講師が 2 週間にもわたって講義

をし、それを現場の教師が受講するという姿を想像し、「古き良き時代」を羨まずにはいられませんでした。(Koyamamoto)

<シンポジウムの感想>

◆日本語教育と国語教育が対立していると認識されている方が国語教育にはまだ多いのだなと驚きました。教える相手が違うので、教え方も異なるということなのですが。現在は小学校では、2014年から外国籍の児童には、希望があれば、文科からの通達で外国語としての日本語教育を「特別の教育課程」として教えることになっています。これは国語の先生はできないため、5年に1回の教職免許更新の研修でみなさん受講されており、私はその講義を依頼されて何年か担当してきました。現場の国語の先生がその違いを一番理解されています。大変興味深いなあと感じていました。また英語は1つしかないとおっしゃっていた先生の発言にも驚きましたアメリカやイギリスで英語母語の子供に教える国語としての英語と、移民で英語が母語ではない子供や留学生に教える英語とは、**Teaching English as a second language** であり、教授法が異なりますね。対象となる言語は当然同じですが、教え方は全く異なります。国語の先生が **Teaching Japanese as a second language** という教え方を習得していないと日本語母語じゃない児童に教えられないことを実感されているので、その点が日本で英語を教えている英語先生や国語の先生が認識されていないのかなと不思議に思いました。対立でなく協力し合うと言語教育のいろいろな広がりが見えてくるのになあと思いました。(Okamoto Noriko)

◆「目的論は不毛だ」と言われることがありますが、たとえ結論の出ない、落としどころのない議論になっても、やはり語り合うことに意味があるのではないのでしょうか。あわせて、教える側の論理と学ぶ側の論理とが戦わされる場面があってもよいように思います。ただ、この種の議論で触れられることの少ないこととして、学校教育の枠組みにおいて、英語科ほど世間一般をも巻き込んで、その存立理由が問題にされる教科はないという点を指摘しておきたいと思います。このことは他教科の人と話していると、時には同情すらされることもあって、英語科はなぜこれほど成果主義で見られるのですかと尋ねられるほどです。こちらも、「そうですね。例えば体育科なんか、幼稚園からかけっこをやっているのに、なんでもっとオリンピックでメダルがとれないんだなどと言われることはありませんよね」と返したりしますが、このあたりの原因を探ってしかるべき答えを出すことも必要かと考えます。どうも英語教師はまじめ過ぎる、おとなし過ぎるという気がしなくもありません。(Dragon)

◆大変に興味深い議題をありがとうございました。英語教育の意義は、英語学習の意義と表裏一体の関係だと思っています。一定の結論を出しづらいものではありませんが、おそらく教員だけでなく学生も同様に、そのような意義を常日頃、模索しているようにも思われます。そう考えると、結論の出しづらさを一歩こえて、なんとなくでも一定の方向性を学生に示せるように、今後も引き続き考えつづけたいと思った次第です。(ポレポレ)

<大会全般の感想>

◆非学会員ですが、この2日間参加をお許しいただき、おかげさまで色々と勉強することができました。今後はオンライン開催という形式ではなくなるかもしれませんが、こういうかたちでの参加ができなくなるかもしれませんが、機会がありましたらぜひ参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。(松田正貴)

◆立派な運営でした。感謝です。(西義一)

◆発表資料をご発表前に共有していただけると質問しやすかったかと思います。はじめて参加させていただきながら、いろいろお願いしたり、不快な思いをされるような発言をしたりしたかもしれず、お詫びいたします。このような英語教育の歴史を多様な側面から研究されている学会があること、とても興味深く、私としては学ぶことが多い内容でした。参加人数がもっと多いといいのと思いました。榎本先生と私は社会言語学で一緒なので、学会連携などいかがでしょうか。このような意義深いご研究を深めておられる学会なので、英語、日本語、国語の先生と研究者がもっと参加すればいいなと強く思いました。ありがとうございました。

(Okamoto Noriko)

◆オンラインによる全国大会、ならびに研究例会にも大分慣れてはきましたが、運営にあたって下さる大会事務局、学会事務局の皆さまには大変なご苦勞をかけていることに申し訳なく思うとともに、御礼を申し上げます。従来の対面形式の場合にもしかるべき苦勞はありましたが、新たな負担が生じているという意味で、この状況が一刻も早く収束することを願っております。

(Dragon)

◆まずは、大会の全てに関わる皆様に心より御礼申し上げます。特に今年は田崎先生のご講演に関して、企画から設営、当日の運営に至るまで、大変お忙しかったと拝察されます。息を呑むような田崎先生のご講演に加え、運営サイドの緻密な連携の相乗効果によってこそ生まれた、素晴らしい記念講演だったと思います。何かしらの形で、この素晴らしい講演をもう一度視聴できることを願っております。(ボレボレ)

◆田崎先生がリモート講演のしかたを心配されていたので、会場を設けてのリモート発信の準備等、おつかれさまでした。(一柳優子)

◆お世話になりありがとうございました。参加できず失礼しました。貴学会の今後ますますのご発展お祈りします。(松本実)

第 38 回全国大会 (オンライン) を終えて

大会実行委員長 榎本 剛士

第 38 回全国大会もオンライン開催となり、実行委員長を連続で務めることとなりましたが、皆様のご協力をおもちまして、無事に大会を終えることができました。特に記念講演の事前準備から当日の運営までを一手に担い、細部にまで行き届いた、とても丁寧で愛のあるお仕事をしてくださった「サポートチーム」の先生方に、あらためて御礼を申し上げます。

振り返ってみると、第 38 回全国大会は、本学会の醍醐味が詰まった大会であったように思います。まずは何と言っても、田崎清忠先生をお迎えしての記念講演です。テレビ英語会話放送の内容と提示技法を開拓してこられた田崎先生から、まさに「歴史の生き証人」としてのお話を伺うことは、純粋に楽しく、同時に、圧倒的な迫力の前に立ちすくむような、緊張に満ちた経験でもありました。発表要旨集掲載の講演要旨を締め括る、「歴史は事実の積み重ねである。事実を記録・分析し、判断に基づく結論を得てはじめて『歴史』となる。貴学会は教育の歴史を探求する研究者組織であると認識しているので、講演に際しては『事実』をお話したいと考えている。」という田崎先生の重い、貴重なお言葉も、ご参加下さったお一人お一人の胸にきっと深く刻み込まれたことと思

います。

研究発表、そして、私自身も話題提供をさせて頂いた参加型シンポジウムは、これまで光が当てられてこなかったことを丹念な資料調査に基づいて照らし出す、隠れていたつながりを見出す、先行研究を批判的に吟味して新たな解釈を提示する、思考の枠組みそのものを問う、といった学問的営為の根幹に触れることができるものでした。これからも、日本英語教育史学会が、他学会ではなかなか味わうことのできない興奮に溢れた、知的な若さ漲るソサエティであり続けることを願わずにはられません。

さて、ここで会員の皆様へお願いがございます。コロナの影響もあるかもしれませんが、ここ数年、全国大会の研究発表の申込み件数が少なく、役員が個別にお声がけをしたり、役員自身が発表したり、といった形での対応を迫られることがございます。会員の皆様におかれましては、日頃のご研究の成果や思索の過程をぜひ、全国大会の場で積極的に共有して頂ければ幸いです。「発表」できるところまで研究が進んでいない、とお感じの方もおられるかと存じますが、全国大会においては、途中経過報告のようなご発表についても積極的な採択がなされます。また、昨年と今年の全国大会では「参加型シンポジウム」を行いました。可能であれば今後、企画者を会員の皆様から募ってもよいのではないかと（大会担当理事としては）考えております。

会員の皆様それぞれの視点を通じて「日本の英語教育史」に関わる学問がますます発展していくことを祈りながら、次の大会実行委員長にバトンをお渡ししたいと思います。

“Rekindling the inner spirit”

日本英語教育史学会会長 田邊 祐司

第 38 回全国大会 (5 月 14 日 (土) ~15 日 (日) オンライン開催) を成功裡に終えることができましたのはひとえに会員の皆様のご尽力・協力によるものです。本学会の会長といたしまして、感謝の念をここに記させていただきます。

特にお礼を申し上げたいのが、記念講演をお引き受けいただいた田崎清忠先生です。先生はテレビという当時の最先端メディアにおける英語会話指導の基本フォーマットを打ち立てられ、後続の同種番組に多大な影響を与えた先駆者 (trailblazer) です。

講演では1961 (昭和36) 年から16年にもおよんだ「テレビ英語会話」の基本方針、カリキュラム、制作上の工夫など、懐かしい (筆者には) 番組のclippingと共に語られました。それは教育者としての矜持に溢れたオーラル・ヒストリー (口述歴史) であり、我々の知的好奇心をかき立てるのに十分なものでした。先生は本講演のため数ヶ月の準備をこなされ、妥協を一切許されず、まさに God is in the details. (神は細部に宿る) を範で示されたことを申し添えておきます。

大会の tone-setter を務められた先生の「熱量」は、その後の会員による研究発表にも伝わったようで、いずれの発表も観る者の知的好奇心を刺戟したことを画面越しでも感じ取ることができました。その tone は、最後の参加型のシンポジウムにも引き継がれ、様々な「切り口」から英語教育の本質をめぐる有益な議論が展開され、まさにトリを飾る内容となりました。

ここで個人的な思いを挟みますが、田崎先生に直接お会いし、講演を拝聴する中で、筆者はフランスの医師 アルベルト・シュヴァイツァー博士 (Albert Schweitzer, 1875~1965) の We should all be thankful for those people who rekindle the inner spirit. という箴言を思い出していました。これは、人は他人と接することで (直接的、間接的を問わず)、内面的な精神に刺戟を受け、成長

する生き物であり、そうした出会いに感謝する心を持ち続けることが大切であるという意味です。学会はこうした各人の *inner spirit* に関与する邂逅を提供するソサイエティ（オンラインであっても）でもあることを実感した次第です。

最後に繰り返しになりますが、本大会の運営を可能にいただいた実行委員長、委員の先生方、なakanずく田崎先生のサポートチームの皆様、司会を分担していただいた方々、理事の皆様、講演の発信会場 ロイヤルパインズホテル浦和の関係者、そして何よりも大会に参加していただいた会員・非会員の皆様の *concerted effort* に心よりお礼を申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

>> 事務局より

>> 2022年度 会員総会 報告

2022年度の会員総会は、全国大会第2日に当たる5月15日(日)の正午過ぎよりZoomを用いてオンラインで開催されました。副会長の馬本勉氏（県立広島大学）の司会で始まった会は、最初に水島孝司氏（南九州短期大学）を議長に選出し、以下の議事を進行しました。

○ 活動報告・会計報告

活動報告・会計報告の内容は別掲の通りです。総会では、事務局長の河村和也（県立広島大学）による両報告に続き、平賀優子氏（慶應義塾大学・東京大学〔非〕）より会計監査報告を受け、2021年度の会計報告については承認されました。

2021年度活動報告 -----

1. 全国大会・研究例会について

1-1. 第37回全国大会（大阪大会）を2021年5月15日・16日にオンラインで開催した。

記念講演は日野信行氏（大阪大学）をお願いした。

研究発表は5件で、大会発表賞は上野舞斗氏（四天王寺大学）に贈られた。

1-2. 5月を除く奇数月に以下の研究例会をいずれもオンラインで開催した。

- ・第283回研究例会(2021年7月17日)
- ・第284回研究例会(2021年9月18日)
- ・第285回研究例会(2021年11月20日)
- ・第286回研究例会(2022年1月8日)
- ・第286回研究例会(2022年3月19日)

*全国大会・研究例会の詳細は『日本英語教育史研究』第37号を参照されたい。

2. 学会誌について

2021年5月、学会誌『日本英語教育史研究』第36号を刊行し、前年度までの会費を納入済みの会員に送付した。

3. 会員数について

2022年4月21日、2022年度名簿原票を104人に発送した。返送・返信の締め切りを待ち、今年度の会員数を確定する。

《速報》 田崎先生のご講演をYouTubeで限定公開

この夏、第38回全国大会における田崎清忠氏の記念講演「テレビ英語会話放送の歴史的経緯：内容・提示技法の開拓」をYouTubeで限定公開します。

視聴にはお申し込みが必要となります。お申し込みの方法等については、学会公式ウェブサイト (<http://hiset.jp/>) に掲載しますので、どうぞ注目ください。

2021年度会計報告

2021 (令和3) 年度 日本英語教育史学会収支決算報告

2021(令和3)年4月1日 ~ 2022(令和4)年3月31日

収入の部		支出の部	
繰越金	1,443,809	月報関係費	40,470
学会費	478,000	事務活動費	34,401
紀要代金	17,000	大会補助費	50,000
広告代金	0	紀要経費	275,900
雑収入	0	雑費	1,210
寄付	5,000	支出合計	401,981
郵便局利子	-		
銀行利子	-		
収入合計	1,943,809	繰越金	1,541,828

以上相違ありません。

2022年5月12日

事務局会計 河村 和也 印

会計監査 平賀 優子 印

同 安部 規子 印

)) 日本英語教育史学会賞・日本英語教育史学会著作賞について

今年度の日本英語教育史学会賞・日本英語教育史学会著作賞については、受賞に該当する方はいらっしゃいませんでした。

)) 日本英語教育史学会大会発表賞について

第38回全国大会における研究発表を対象とする大会発表賞は、柗木貴之氏(北海学園大学)に贈られました。

《発表題目》平川唯一「英語会話」テキストの研究：

先行する「英語会話講座」「実用英語会話」テキストと比較して

)) 年会費の納入について

早々に年会費をお納めくださりありがとうございます。事務作業の都合上、7月末までの納入にご協力ください。どうぞよろしくお願いいたします。

【年会費】

一般：5,000 円 / 学生：3,000 円（大学院生を含む。学生は初年度に限り無料）

【送金先】

- (1) ① 郵便局で払込取扱票をご利用の場合
② ゆうちょ銀行の総合口座（旧ぱるる）よりご送金の場合
→ ゆうちょ銀行 [振替口座] 00150-3-132873
- (2) ゆうちょ銀行を除く金融機関の口座よりご送金の場合
→ ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキユウ）店 [当座口座] 0132873

送金先の口座名義は「日本英語教育史学会」です。恐れ入りますが、手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

近年、払込取扱票によらずご送金くださる方が増えておりますので、これを同封するのを取り止めております。払込取扱票をご利用の場合、お手数ですが郵便局の窓口で「0」から始まる口座への送金とお伝えのうえお受け取りください。

『日本英語教育史研究』第 38 号 投稿論文の募集

2023 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 38 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日（金）23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先（紀要編集委員会） kiyo@hiset.jp

)) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 289 回研究例会 2022 年 9 月 17 日（土） オンライン開催
- ◆ 第 290 回研究例会 2022 年 11 月 19 日（土） オンライン開催
- ◆ 第 291 回研究例会 2023 年 1 月 7 日（土） オンライン開催
- ◆ 第 292 回研究例会 2023 年 3 月 18 日（土） オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要（100～200 字程度）、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日（11 月発表希望であれば 8 月 10 日） までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

)) 新入会員

- ◆ 吉村 和也 (よしむら かずや) 奈良県 四天王寺大学学生
- ◆ 伊藤 航太郎 (いとう こうたろう) 秋田県 放送大学学生
- ◆ 五十嵐 優子 (いがらし ゆうこ) 京都府 立命館大学

日本英語教育史学会 第 288 回 研究例会

日 時： 2022 年 7 月 16 日 (土) 14:00~17:00
オンライン開催

自著を語る

『多言語教育に揺れる近代日本：「一外国語主義」浸透の歴史』

下 絵津子 氏 (近畿大学)

指定討論者：孫工 季也 氏 (京都大学大学院)

【著者から】拙著では、明治・大正期の日本の外国語教育政策について、特に中学校に相当する学校の教育に焦点をあて、日本の外国語教育がなぜ英語一辺倒から脱却できないのかを考察した。紹介を通して、「なぜ外国語を学ぶのか」「いくつの外国語を学ぶのか」という問いに改めて向き合い、これらの問いに今後どのようにアプローチできるかを検討したい。

研究発表

<変則英語>を再考する

拝田 清 氏 (和洋女子大学)

【発表者から】本発表は日本の異文化・異言語受容のあり方を通事的に検証する研究の一部をなすものである。明治中期以降、「変則英語」教育と呼ばれた訳解中心の教授・学習法は、否定的な文脈で語られることが多い。この語学教育における「変則」、そして対概念としての「正則」の背景にある理念は、江戸中期の儒学者らの言語文化教育観にさかのぼることができる。本発表では、漢学における素読・会読という外国語学習・教授法が蘭学、そして英学へと連関していく過程で、単なる技術・方法論だけでなく、言語文化教育観も継承されていったとの仮説をもとに、その検証とあわせて「変則英語」の再評価を試みたい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 新型コロナウイルスの話ばかりで恐縮ですが、6月に入り、全国の感染者数も一日に10,000人を下回る日が出てきました。／昨年であれば10,000という数は警戒が必要な印象でしたが、オミクロン株の流行で10万を超える経験をしたことで、今は少ないと感じられるようになってきました。／コロナの問題で、自由に移動できることは実はとても有難いことなのだとということに気づかされました。簡単にはいかないかもしれませんが、このまま収束に向かってくれることを祈るばかりです。(若)

◎ 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)